

# KDA

(社) 京都デザイン協会

## Letter

KDA Letter : 会員のためだけの会員紙  
1993年4月 : 第2号 <隔月刊>  
発行 : (社) 京都デザイン協会

\*\*\*むしのいどころ\*\*\*

## 京都デザイン協会の ルネッサンスを 推進しよう

本郷大田子 <K D A 理事長>



### ●ルネッサンス

先だって、京都国際会議場で催された「地域デザイン会議・'93京都デザイン会議」はひとまず成功に終わった。今回のデザイン会議は例年のと一寸違ったナと感じた方もあったはずだ。(財)日本産業デザイン振興会が全国各地で開く「地域デザイン会議」と、私たちが手がけてきた「京都デザイン会議」が合体して、冒頭のいさか長めのタイトルの会議になった。

この会議のテーマが「京都デザインルネッサンス=地域から世界へ」としていたが、そもそもこのタイトルが縁で異例のドッキングスタイルになったのだ。「ルネッサンス」という言葉を偶然にも2つのデザイン会議が選んでいたというから妙なもんである。妙なんだが、ただの偶然ではないかも知れん。今日のように時代が大きなうねりをもって変化し

ているとき、当然デザインも大きく揺れる。環境等の地球の正義がものごとの大前提とされるとき、デザインもそのありようを、もう一度問い合わせなければならないかも知れない。

「ルネッサンス」という言葉の中にひょっとしてそのヒントがあるのかも……。

### ●余談

会議のパネラーとして来られた旧知の長澤忠徳氏が、「長年この会議に関わってきたが、今回のように立派なのは初めてだ、こんな

不況のときに、今、東京はひどいもんで、デザイナーは皆ペシャンコですよ、誰もこんなことに手を貸さないのです。京都はやはり底力がスゴイですねー」「マアね」と私。

「バブルの崩壊であっけなく消えるデザインて、何なんでしょうね」「ウーン」と私。

「その点、京都は地に足がついてるというか、デザインをデザイナー自身が知ってるという気がしますね」「マアね」と私。

(ホントはそんなことありまへん、京都もいっしょですよ。けど、外から見るとそう見えるのかな、ほんまはそうあらねばイカンということやナ…)

### ●京都デザイン協会

昨年の創立25周年の記念事業は大変だった。早いものでもう1年が経つ。皆さんに相当なエネルギーをつぎ込んでもらったが、あら

ためてこの協会のパワーの凄さを知った。まだまだ未開拓の会員諸子の力を結集すればどんなことができると思った。

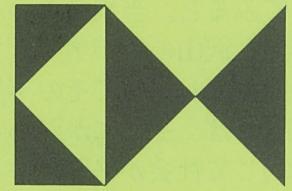
さて、26年目は、まず内部の充実を計って新しく出発しようということになって、事業の整理と解りやすい委員会の仕事を目指して新しい組織を作った。

よく理解してもらう為に初めて合同委員会も開いた。幸いディレクター諸子の力で何とか動き始めた気がする。実際すばらしいプラン程動かないまま銷てしまいがちである。しかし、今年はかなり期待できるゾという感じである。

数年前、あることで大分県の平松守彦知事に会見することになった。一村一品運動で大分県を一躍有名にした人である。

知事は、「一村一品運動」は単なるモノづくりではない、ローカルにしてグローバルなモノづくりを通して、自分達の地域に誇りを持ち、チャレンジ精神をもった青年が育つ。これが、この運動の究極なのだ。地方がよくならないと日本がよくならない。しかもこの思い入れは年々胸の内に強くなっていく。地域は地域なりに、マイナスをプラスに転化する柔軟な発想で、東京にない独自のデッサンを描く。

こんな気持ちで今までやってきた、と語られた。5年前の話



であるが、フト今、頭の中にダブルのである。無理やり言葉を置き換えてみると。当協会のいろいろな事業に沢山の人がアイデアを出し合い協力しあってその事業を成功させれば、そこにかかわったことを通じて社会が必要とするデザイナーの資質が高まる。京都のデザインがよくならなければ、日本のデザインはよくならない。

京都は京都なりに、マイナスをプラスに転化する柔軟な発想で独自のデッサンを描く、となる。まさに村おこしみたいなもので、一寸表現が古くさいが、協会おこしなのである。ちなみに、帰り際におみやげとしていただいた知事執筆の本「東京でできないことをやってみよう」の帯に「ふるさとにルネッサンスを！」とあった。

## ●再びルネッサンス

話をもどすが、「地域デザイン会議・'93京都デザイン会議」に参加する前、めずらしく「ルネッサンス」を百科事典で引いてみた。(こんなことはめったにない)。安物の事典とは云え4ページにわたっての記載はさすがと思われた。

一番気に入ったところを自分の思いも込めて紹介しておこう。我々が理解しているルネッサンスという概念は1860年スイスの文化史家ブルクハルトの《イタリアにおけるルネサンスの文化》によって確立したとされている。この中でブルクハルトは「人間と自然の発見」を強調した、と記載されている。人間と自然の発見、そう、京都デザインルネッサンス、デザインの再生だが、それは発見によってなされるのにちがいない。仮に、京都デザイン協会ルネッサンスとしてこの協会の明日を望むなら、いくつもの発見によって、次時代の創造がなせると思うのだが、いかがであろうか。

# MEMBER'S FREE TIME FREE TALK

\* KDAは現在会員数216名。ここは会員の紹介コーナーです。

### ●高木デザイン事務所 高木唯可

しごと: イラストレーター

しごと場: 京都市左京区松ヶ崎  
西山11

主な作品: ・園部町立川辺小学校  
校壁画「緑の風」  
・園部町立園部幼稚園壁画  
「春の中で」  
・能登川町立障害福祉センターハンガーベン画



▲園部町立川辺小学校壁画「緑の風」

### テーマは いつも「自然」

●90年から3作の壁画を制作した。幼稚園、小学校、そして身障者センターの何れも玄関ロビーの壁面を使わせていただいた。表現や技法は壁面の状態や地域性を取り入れ変化があるものの、テーマはいつも“自然”。子供達が元気にのびのび成長することを望むと同時に、彼らのために豊かな自然を残したい。四季の移ろいを観察し、生態系の中での人間の関わりを見極め、自ら表現することのできる人間に成長してほしい。今、世界中が心を碎く環境問題。素材や工程、消費に関わるデザイナーが、地球を守ることもデザインする責任がある。

### ●芦谷デザイン事務所 芦谷 実

しごと: グラフィックデザイン

しごと場: 京都市右京区嵯峨野清水町8-36

主な仕事: 精密画像処理、医療検査機器関係  
のカタログ、パンフレット、パッケージ、マニュアルなどの企画制作、それをマッキントッシュで補完

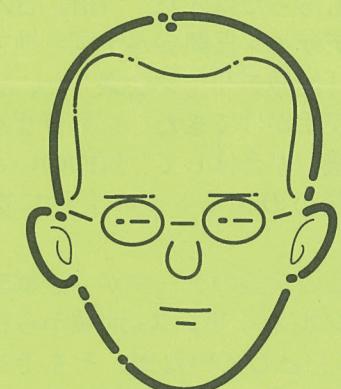
### たかがデザイン されどデザイン。

●経営資源は人、物、金、情報と言られて久しいが、それに加えて第五の資源として「デザイン」が重要視されようとしている。

個々のデザインからCIに至るまで企業の中での「デザイン」の役割は大きくなり、重要な位置を占

めかけつつある。こういった中で単なる表面的な美しさや機能性、利便性の追求だけでなく、今日の社会が求めていた個性、知性、感性等をとりいれ、その企業の社会的役割、顧客の利益を考えたデザインをしていかなければならぬ。

そして今、自然環境、恒久世界平和、発展途上国への貢献等々言われているが、そういった世界的視野で物事を考えられるデザイナーが、多くの企業の指導的立場に立ち企業経営に参加し、提言、貢献しなければならない時期に来ている。それには個々のデザイナーが目先に捕われず、それらを勉強し先見性と洞察力を身に付け、世界との共生の中でデザインを考えていく必要があるのではないだろうか。



■協会からのお知らせ■

### 第2回

京都デザイン協会交流フォーラムを  
開催します  
□6月4日(金) PM2~5  
□祇園ABLホール

## これは必聞!

メディアディレクター

残間里江子さん  
登 場

\* 残間里江子と賛助会員による

トークフォーラム\*

テ  
ー  
マ

“企業における  
デザインの  
ありかたは?”